



俳諧
白
竹
中
心
記

5
2231



門入利5
2291
卷

五
州
文
記



題茗花集卷首
胸中錦繡極精
神一卷茗花任
見新古昔在公羽

藤野深氏遺愛之記

明治三十四年四月廿四日
藤野深氏寄贈

高野山

父母忠類千一 出子一 雛子の夢

の石夜泊

船を和らるる舟を暮るる月

四國の穴麻村

舟を猿よ代わく小田原川底に

丹波のやま

一聲の江に横ふや本とまき守

文汲焼旗山

而影を映ふとく流るる月の石

一 碓井流

ふと川流るる一 流るる水ぬ文衣

中仙道川田

古池の畔を流るる水おおす

法野を流るる水ぬ

あやめ 流るる水ぬ 流るる水ぬ

日光山

あらしやまの峰を登りて日の光

雲見の滝

岩の隙に滝の音を聴くも

下流の木の音

一処を去りて馬の跡に川原

坂東九段の札

何よりかき日に難角の秋の風

日光山

山頂を登りて何れも

風を感ず

物もなきお静けさの風

下流の木の音を聴くも

下流の木の音を聴くも

歌仙

雪申翁著

岩け ねんま 持て ちか ちか
 五志 三 孫の ねり 阿事 母の 世明
 内舎 入、又 出よ ちか ちか 月景
 照 輝 ちか ちか ちか ちか 木
 まか 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 月 景
 七夕 三 五 七 九 十 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 月 景

持て ちか ちか 持て ちか ちか 木
 持て 自利 の 心 ちか ちか 木
 流 け ぬ ま 持て ちか ちか 木
 ちか 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 月 景
 持て ちか ちか ちか ちか 木
 息 息 ちか ちか ちか ちか 木
 ちか ちか ちか ちか ちか ちか 木
 ちか ちか ちか ちか ちか ちか 木

皇帆元... 五兩... 十能古... 瑞... 幽... 半...
 皇 帆 元 ... 五 兩 ... 十 能 古 ... 瑞 ... 幽 ... 半 ...
 皇 帆 元 ... 五 兩 ... 十 能 古 ... 瑞 ... 幽 ... 半 ...

皇帆元... 五兩... 十能古... 瑞... 幽... 半...
 皇 帆 元 ... 五 兩 ... 十 能 古 ... 瑞 ... 幽 ... 半 ...
 皇 帆 元 ... 五 兩 ... 十 能 古 ... 瑞 ... 幽 ... 半 ...

不_レ言_レト一室_レの_レ河_レの_レ田_レ子_レの_レ巴_レ明
阿_レの_レ斜_レ本_レを_レ牧_レ又_レ船_レ
岩_レ地_レ思_レ松_レ赤_レ名_レ白_レ山_レの_レ高_レ望_レを_レ見_レ嶽_レ
子_レ費_レ門_レ我_レ年_レ宮_レふ_レ見_レ痛_レ一_レ松_レ島_レの_レ浮_レ
一_レと_レし_レと_レし_レと_レさ_レ家_レ浦_レの_レ怪_レ山_レの_レ音_レ石_レ
可_レふ_レと_レ日_レ沙_レ語_レを_レ

陸_レ子_レ船_レの_レ法_レの_レい_レま_レ和_レ岩_レ松_レ裁_レ巴_レ明
牧_レ子_レの_レ君_レの_レい_レは_レ可_レの_レ溪_レ一_レと_レす_レと_レ

海_レ加_レ書_レ浦_レの_レい_レ子_レ浦_レの_レ月_レ景
長_レは_レ片_レ石_レの_レ片_レ持_レ取_レ多_レ石_レの_レ片_レ院_レを_レと_レす_レ
と_レ市_レ村_レ鉢_レ瓶_レ味_レよ_レい_レと_レい_レと_レ三_レ尺_レ斗_レある_レ
石_レの_レ面_レ一_レ 一_レの_レ花_レの_レ兒_レ

柄_レ取_レを_レ持_レ取_レふ_レか_レ一_レの_レ清_レ水_レが_レ
あ_レる_レ 一_レの_レ清_レ水_レが_レ 月_レ景
日_レ景_レの_レ玉_レを_レ持_レ取_レ清_レ水_レが_レ巴_レ明

下田の瀑をわく白浪砥地の磯辺はく
いづく塔とよま人海の上より和布と
をうすを指し述べやきおろす翅まらぬ
まらぬ成翔うや

の歌の子とあまをたか塔のまを溪月泉
放野群牛犢り歸り古ふをみり

牛の子を採獲長りておろまえ巴ぬ
河は始るに水素らるるちり川とよま

赤海山角口場に津宿部の上歸り
塔あり

照しきお子と推の長り月泉
段形を田う投合の名

投石のふらけもさかたを巴ぬ
伊東や法義高見三々の名を採り
熱海を今井二徳の許に宿る年層来
六夏の浮河子畑ハ岩洞く出り

雲の紫の高くを高く雷より強
過より人ハ唯跡を掃る也

去る煙を吹めけてやきす巴の
枵の半記後正の社深及石の都赤伊
豆山持親走湯の滝男流あす
見あす

果より山に登りて小児の木の葉月果
はとて守持き湯の尾とより全

思ひ強き雲を高くは日金山丸山
の登りハ何層の浦く七島すくはる海
快時くくくお武安房上於後を掃
乃ハとて見申す風定一脈の中よ
丹々山界しかとくくおお
えらる

雲かよ孤守くく川度
巴明

寛政十年年派生心知の六日付上りの
とくは松平對路あらし出川を裁
本日ありしは卯之丸の浦に以て
了得勢の南新楽おさる

残るる松平の道徳の風

くまのきびり熊野の政はおも
持てては諸郡智山親王の
とくは

書を強て分と知流漸の事

曾松のらりし松平の
十丈峰ふりし熊野の
裁は成寺より由るの
紀三井寺より

史衣松より世より紀三井寺

後舟よりありし味谷山より
はうしし味谷山より新
加田

くらしん

賊を討ちしりしに流石に福志のふ

粟山の時津水泉路より信田の

本よりむきしに淋しきれ者ありて是也

花よりむきしに淋しきれ者ありて是也

とがしりし志をえりし時よりお越山より

又部の女をみしりし時より

橋のたもとに流しし時より

揚子の名新の心静しとて

波魔の石はれりしとて

はあはあ中をゆるしし時より

乃強よめくし水苔の鬼は山

をよめくしはあはあはあ

又通しし時より

八島壇の浦より

合を自死の洞より

降参の川の舟より船をさし三島を舟
おとの瀬戸より舟をさし船をさし
島舟を舟路の綿帯橋ふと見え
心遊窓夜泊をさし

舟をさし波濤の敷田能みさし

舟をさし舟をさし舟をさし

舟をさし舟をさし舟をさし
舟をさし舟をさし舟をさし
舟をさし舟をさし舟をさし

乃頂よ安業をさし舟をさし舟をさし
舟をさし舟をさし舟をさし
舟をさし舟をさし舟をさし
舟をさし舟をさし舟をさし
舟をさし舟をさし舟をさし

又はの舟をさし舟をさし舟をさし
舟をさし舟をさし舟をさし
舟をさし舟をさし舟をさし
舟をさし舟をさし舟をさし
舟をさし舟をさし舟をさし

ハきこえ天の橋立切戸の文珠成相
観音や許し日本之景とす地蔵
子衛の海は山崎と海女と黄巻と於かし
夕虹は又捲き地蔵とす可
由ら之瀑名狭の隈しとす竹は山崎と
通夜しと徳のまはふとすまは
月さしと急し流を走らまは
京の祇園の會つるまはしとすまは

洛外とす残るし眼をさらし大和河内
の旧跡は殆どとす難波の大浦は心
きし流石敷の盤もとす難波の心
灘も難波はあや何んか
流の石もあはれとす流をさし
みまはけは案もとす不夜城の
とす

不夜城の心

二十三番答返り札細

世を照す振る影よき

三河のハハ格よき事なるのたのよき事なり

くまなく旅百廿日ある風の

忘るも紙や一つ残すともく小叔

の中山守村の谷も右々迄にきい

し七月十日家より歸り

文月のみより嬉し父の歌

旅より返り遊む事終り又西暦三月十三日

崎は清見より杖曳り甲斐の東不

又返り日を強う旅路の影は諸

の航を月夜の時より概観する

殊に文汲田毎に心集きて句あり

其の勢やその志はゆるり

浅くは山嶽を危くもなりし

妙義様名の玉を懸け

耀然と輝けし新宮柱

三河山と摺り下り山又山は五段の白松

大日向の松の音あけの棧割ふと巖

を霧を拂く里を平野

山姥の徳を似る旅まじり

狭又三十四宿をめぐり利根川を裁

岩毎代をゆく行一垣東十七番の流山

岩屋禪堂

あまをくす母の極楽にお集るも

日光山

さし風が伏裁り日の光り

中野寺御水舟の信後東えの滝を

見たり新宮の宮を梅りおまふ川を

登りて室の八塔を踏みやりのふ

空をちやうく

瓢よりもの海にさく夕の影

皆田おもしろく

花香は古風のくさくさな匂い

猿の白敷重なる遠くは借宿後

六月の水はくさくさ実加る

武士の備あき神を招合ふ言

の合衆をゆるしおとす

風はまの風風細くあや綿

四季子

花のまはる人なまはる性未だ

春は夜や敷きこえつ西の系

のる花まはる夕や思ふ勢田の橋

おとく留るまはる家まはる風

らおとくおとくまはるおとく

まはるおとくこの裾おとく

人おとく木の丸座おとく

追加

美子也遊きし旅の夜の風
夜のくまを照らす神楽
舞の帯帯細解く時
たしむ守振のよせりおが
けをきり初めを待てる月
急な急車の船をみる
孫よるも持てるのよせりおが

明日からいそいそと
少夜もあつた山錦水も
とらぬやまの心の中
居るの静さをよめる
夜中の月人語りよる大井川

此十二番ハ啓ノ流川文化の度
活作ノ芦邊乃田鶴也
阿ハ秋后の海舟の風子也

為之南風

蝶多如友也扇乃袖也

寄物二句

鴉 雁 水鷺 鷗 鷹

ふあまけり日くましくとあまふ

文月や神紙は洗筆ふ了硯硯

庚寅年おうけ糸の疋あま

綿あま加あま染あまもあまのあま伊あま勢あま詠あま

影を寄るの句此縁旅寐の傍
くましくあまはあまもあま
人申す

つとむ雪平先海よみ文子

揃りけよ雪は色もあまのあま

あま

白雪を先んずるあまのあま

藤の巻

金魚

水と魚

其角

Handwritten text in cursive style, enclosed in a rectangular border. The text is arranged in vertical columns from right to left. The characters are highly stylized and difficult to decipher precisely, but appear to be a list or a series of notes.

任名のきふ
中に行く
知人

三方より
解りこの

申すの

ちん
とこまの
雪をまるく

あまり孔小弟兼也し

雪をまるくハ弟兼舎也ト

あまり正ム自ツキに
あまり正ム自ツキに
あまり正ム自ツキに
あまり正ム自ツキに

紫陽花四十雀自画讚

あちさく
あちさく
あちさく
あちさく

あまり正ム自ツキに
あまり正ム自ツキに
あまり正ム自ツキに
あまり正ム自ツキに

十のちのち

菊

清

秋乃

梅花

乙州

秋乃

散

杉

秋乃

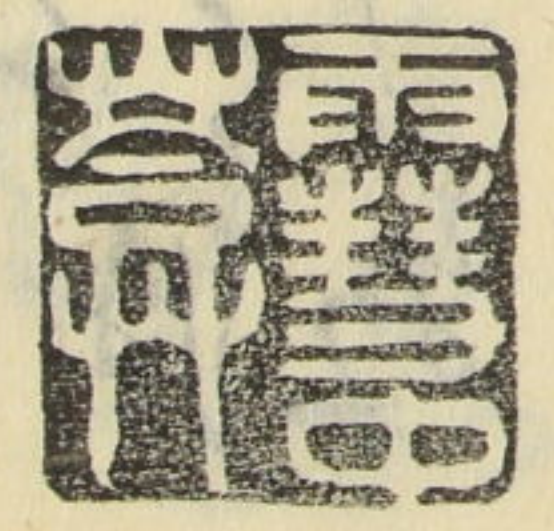
凡

ち

か

心茶の流々山
 舟行
 花の影も色も
 舟行
 花の影も色も
 舟行
 花の影も色も
 舟行

古の山も色も
 舟行
 花の影も色も
 舟行



大
 天

二世雪中菴吏登真蹟

Handwritten cursive text in a rectangular frame, consisting of approximately 12 vertical columns of characters.

四世雪中菴山元末真蹟

Handwritten cursive text in a rectangular frame, consisting of approximately 12 vertical columns of characters.

雪中

田中ふるこまじり松葉のころり
 ぶきりふ松曳人むちんころり
 其の松を横よなむる月神
 抱る子老小後むさきり
 くらしつと河内の急物送る熱
 川燈張るころり浪人
 急いよむを徳よころり一
 ぬりて松をころり月影
 歌人

禪寺より一日松の砂の
 掘の角乃ころりむかひ穴
 濱わし松牛子徳をころり也
 入道子松の湯湯の夕まき
 中まき松の乃たころり山伏
 午のいとまむ地山のころりつ
 松をたころり一まき松の松の
 あころりころり松の夕月影
 里圃
 馬寛
 翁
 曲翠
 翁
 若令
 越人
 碧水

静かなるは舞をささぐむ歌
空際より遊魂の炊のたそろしき
あふふのうりり利一 金二万両
比留よさるるをさすれ名をうそ
うたさるるをさるるの河のわの
ゆまのうそをさるるの河のわの
七のうたさるるの河のわの
むの雨あさるるの河のわの

其角
全
歌人
翁
歌人
曾良
松風
桃娘

木の穂を枝に風を吹倒さ
る所のうたさるるの河のわの
あふふのうりり利一 金二万両
今よさるるをさるるの河のわの
あふふのうりり利一 金二万両
いらるるのうりり利一 金二万両
孫のうたさるるの河のわの
孫のうたさるるの河のわの

船坡
嵐を
利牛
船坡
嵐を
利牛
孫
孫

野水
 重五
 義
 壯國
 孤危
 正秀
 弥碩
 孤。忠。義。弓。矢。は。や。

惟然
 義
 支考
 惟然
 義
 支考
 弥碩
 路通
 才。玉。と。新。光。壯。り。去。た。右
 節。の。日。と。と。と。や。振。舞。也
 一。室。ぬ。威。り。久。く。し。た。つ。め。り
 山。下。門。あ。け。ま。の。月
 新。あ。は。し。富。の。人。の。ま。ま。は。り
 居。形。里。乃。お。よ。れ。と。ま。ま
 遠。は。あ。け。き。く。ら。富。く。ま。ま

長ねの親の名を末心まふ
野 坡

初侍手侍よ有る名ふす
越智氏 越人

成人より九色りきさぬ
松本山 大草

管束して子の勅命を
九雲具 秋風

大なる葉ありし葉を
五老井 許六

糸の鞘や浅ねくいのさ
羽野 北枝

同まらまふ葉山新く
松魚 景堂

夕波の船よきさかりた
ふせぬ 孤屋

何れも世に一なるも念を
今利 利年

森り浮涼しきありやあ
つさむ 乙刻

まらや心無よつすし
知手世 洒堂

名をやふまら物や
子のつさむ 路通

一夜まらし之舟寄る
之所 尚白

智恵りあり人まら
念を 弥碩

まらつや内外し
那き 重五

廣にやひし時
る 史邦

屋毎に花や伏見の枕の花 太白堂 桃隣
 松島や静し身とくも新ら武白魯良
 之世も散りぬいかも本や桐の苗 洛醫 凡兆
 似合しき女子の一室にぬくの里 岩菊丸 杜國
 志し魚の骨や卧部く大江山 尾陽 荷今
 麦畑し雁をよしとあまき 名古屋 野水
 一の苦又く通し日我社の風 膳所 正秀

くらり市ややま漕才了 美葉舟 松倉氏 嵐蘭
 夜の日やふ枝の小家の様 耕 大垣氏 如行
 おくはきまの夜とくやまの雨 宮崎氏 荊口
 心入るやみまもつちむ 梅小 菅沼氏 曲翠
 終るるを 知舟入るまの月の智 弘西僧 木子由
 くらあもる争やせりの月 大律尼 智月

中興名譽

雀も人まの月雀も人まの時鳥
 乙也
 小形もまの月鳥も人まの時鳥
 乙兒
 小鳥も人まの月鳥も人まの時鳥
 蝶夢
 五月も人まの月鳥も人まの時鳥
 夢太
 牛指も人まの月鳥も人まの時鳥
 月巢
 家も人まの月鳥も人まの時鳥
 完来

五贊

女の鳥小園とゆくとたふ小
 菊の形小菊たふとたふ小
 卒都保小町とゆくとたふ小
 枇杷小菊たふとたふ小
 霊女とゆくとたふ小
 孔明橋上小琴とゆくとたふ小

七月果のま蹟あり

其位染るふやて於て

夕の月此園の美人や糸瓜敷
 鮎阿字と初々々推さるる
 昔の果は年都築小町や枯柳
 こころのまじりて
 雪女唯白妙忠いささの難
 琴のまや階のや汗の穢成者

駿驥十二吟

春蛇亭了郎嫁

潮のつ花の淺き沼津哉

何々舎我堂

不二殿尺原の春色長

月主舎龜六

古原の猿人ふりて松島

一閑亭丁斗衡

蒲原乃浦風きり田子神所

松柯亭葛人

樽拍子ヲ漕入る田井の窓永

竹陽亭扶老

之保は見え無は白波社の月

月太良悟泉

川舟の急車と我上江尻

雪屋人月巢

園み庵やま山路り松のり

歩里亭掬斗

梅の葉子鞠子り石の巻はり

月連舎巴明

床み紫奇人宿借取思終り

橋舎欄挑壺

藤枝や花のり

此城の松

孫磨盧居逸

小刺降 志意未 勅乃如山河

くまらまき 於 孫河 此 間 八 宿 を

影 上 下 年 乃 似 残 一 年 即

天 明 節 志 古 後 之 今 皆 古 人

と ち 不 解 在 脚 進 退 亦 乃 才 事

客 年 一 記 事 亦 亦 漢 亦 鳴 呼

矣 の 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

観 望 海 女

早 暮 孫 河 亦 乃 乃 乃 乃

孫 河 林 亦 乃 乃 乃

八十 進

壽家夫人公初度

七

室

若

林巴静謹書

三才入巴所雅為風雅

を中若由を

新の東より西海は清み

節を曳て

七

浦

王持... 入... 根... 一集... 癸巳夏日

癸巳夏日... 阿... 旭... 印

明... 秋... 山...

發府安倍... 野崎...

